

松東遺跡 4
— 11 次調査の成果—
Matsuhigashi Site 4
The 11th excavation report

浜松市教育委員会

2021 年 3 月

Hamamatsu Municipal Board of Education, March, 2021



例 言

- 1 本書は静岡県浜松市東区天龍川町地内における松東遺跡 11 次調査の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は、都市計画道路天竜川駅前線改良に伴う道路整備工事（車道拡幅）に先立ち実施した。現地発掘調査及び整理作業・報告書刊行作業は、事業主体である浜松市（土木部東浜北土木整備事務所）からの依頼を受けて、浜松市教育委員会（浜松市市民部文化財課が補助執行）が実施した。調査の費用は、浜松市が負担した。
- 3 発掘調査の面積と期間は、以下の通りである。

調査面積	121 m ²
調査期間	現地調査 令和 2（2020）年 5 月 11 日～5 月 22 日
	整理作業 令和 2（2020）年 6 月 1 日～令和 3（2021）年 3 月 19 日
- 4 現地発掘調査は、鈴木京太郎（浜松市市民部文化財課）・川西啓喜（同）が担当し、渡邊三恵（同）・安川あや（同）が補佐した。整理作業ならびに本書の執筆・編集・写真撮影は、鈴木が担当し、川西・安川が補佐した。
- 5 調査にかかわる諸記録及び出土遺物は、浜松市市民部文化財課が保管している。

凡 例

- 1 図中における方位は磁北、標高は海拔である。
- 2 遺物の実測図における番号と、写真図版における番号は同一である。
- 3 本書で報告する土器の断面と種別は以下の通りである。

	弥生土器		須恵器		灰釉陶器
---	------	---	-----	---	------
- 4 本文中の引用文献の表記については以下のように略す。

（財）浜松市文化協会→浜文協	（財）浜松市文化振興財団→浜文振	教育委員会→教委
----------------	------------------	----------

目 次

例 言・凡 例・目 次

第 1 章 序 論	1
第 2 章 調査の成果	5
第 3 章 総 括	12

図 版

第1章 序 論

1 調査の経緯と経過

調査の経緯 松東遺跡は、天竜川沖積平野に立地する弥生時代～中世の遺跡である。これまでに3度の本発掘調査が実施されており、弥生時代の集落跡から銅鐸の破片が2点出土している（浜文協 1990b、浜松市教委 2014）。また、奈良～平安時代についても、官衙的要素のうかがえる遺構・遺物が確認されていることから、周辺の遺跡も含めて永田遺跡群と総称され、長田（長上）郡家の所在地に想定されている。

松東遺跡の南側にはJR 東海道線の天竜川駅が存在する。この駅は通勤・通学客の乗降が多いものの、従来の駅舎は改札口が北側しかなく、駅周辺の道幅も狭小であるなど、利便性や安全性に課題を抱えていた。

こうした課題を解消するため、JR 天竜川駅とその周辺では駅舎の橋上化、駅南北口への広場やロータリーの整備、周辺道路の拡幅等の改良工事が進められている。松東遺跡の範囲や隣接地については、こうした開発事業が相次ぎ、2011 年以降毎年のように試掘・確認調査を実施している。

そうした中、都市計画道路天竜川駅前線の改良工事が具体化したため、将来的に車道となる拡幅部について 2019 年 11 月に確認調査（10 次調査）を実施した。この調査において遺構・遺物が確認されたことから、本発掘調査（11 次調査）を行うこととなった。

調査の経過 現地調査は 2020 年 5 月 11 日から 22 日まで実施した。調査面積は約 121 m²である。湧水が想定されたため、重機による表土除去時から水中ポンプ 2 台を用いて排水処理に努めたが、天候不順が重なったこともあり排水処理能力が追いつかず、調査区を 5 分割して排水処理の範囲を限定し、南側から順に調査を進めていく手法を選択した。遺構の測量作業は主にトータルステーションを用いて行い、写真撮影はフルサイズセンサー搭載のデジタルカメラと中型フィルムカメラ（6×7 判）を使用した。

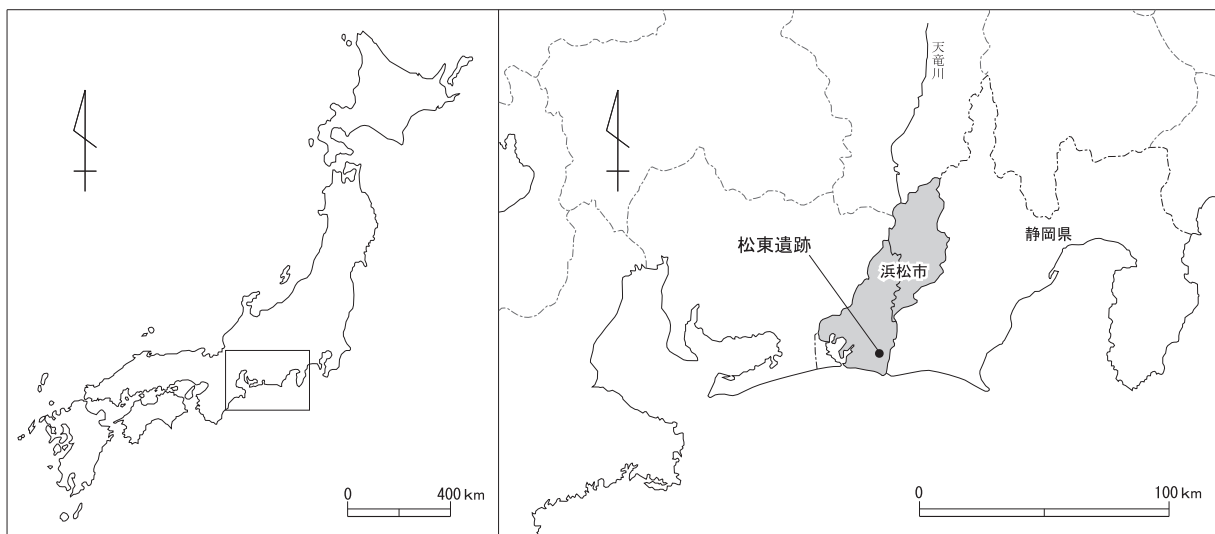


Fig.1 松東遺跡の位置

2 遺跡周辺の環境

地理的環境 静岡県の西部に位置する浜松市は、北は赤石山脈系の山地、南は遠州灘、東は天竜川、西は浜名湖に囲まれている。長野県の諏訪湖を水源とする天竜川の流は遠州灘へと南下しており、赤石山脈系の丘陵南縁部から扇状地を形成している。扇状地の西には三方原台地、東には磐田台地が広がる。これらの台地は扇状地が隆起したものであり、その縁辺部には河岸段丘が形成されている。

松東遺跡は天竜川平野の南部に立地する。遺跡の東方約1kmには安間川、西方約2kmには芳川、両河川の間の本遺跡の西方約800mには宮井戸川が流れている。現在の本遺跡周辺はほぼ平坦であり住宅街が形成されているが、本来起伏のあった地形を盛土によって整地したものであり、かつては幾筋にも分流した小河川的作用により低湿地と微高地が形成されていた。本遺跡をはじめとする周辺の集落遺跡の多くは、そうした微高地上に形成されている。

歴史的環境 天竜川平野南部において人々の営みが開始されるのは縄文時代晩期であり、宮竹野際遺跡、山の神遺跡、松東遺跡、森西遺跡等からわずかながら縄文土器が出土している。

本格的な集落の形成は弥生時代中期以降であり、後期に盛行する。中期では将監名遺跡で環濠集落が確認されているほか、宮竹野際遺跡では水田跡が検出されている。後期には本遺跡のほか、山の神遺跡で環濠集落が確認されているほか、森西遺跡、越前遺跡、寺西遺跡などでそれぞれ集落跡



Fig.2 周辺の遺跡分布図

が検出されている。

本遺跡周辺から芳川下流域にかけては銅鐸の出土例が多いことで知られており、木船1・2号銅鐸、ツツミドリ1・2号銅鐸などが完全な形で発見されているほか、本遺跡では、飾耳破片と鈕部分の破片の2点が出土している。銅鐸そのものではないが、森西遺跡では銅鐸形土製品の破片が、将監名遺跡では銅鐸の舌が出土している。

古墳時代になると、大蒲町村東Ⅱ遺跡で竪穴住居跡が確認され、越前遺跡、山の神遺跡、宮竹野際遺跡等で若干の出土遺物がみられるが、弥生時代と比べると本遺跡周辺の集落は著しく希薄化する。一方で、天竜川平野中部の恒武・笠井遺跡群では古墳時代を通じて遺構・遺物が確認されており、集落が拠点化していたことがうかがえる。

奈良～平安時代の本遺跡周辺は、長田郡（後に長上郡）の郡家に想定され、本遺跡では銅印や墨書土器等が出土しているほか、大蒲町村東Ⅱ遺跡で木簡等が出土し、宮竹野際遺跡でも墨書土器や陶硯等が出土している。また、木船廃寺跡では瓦が大量に出土し古代寺院の存在がうかがえる。

鎌倉時代の本遺跡周辺は、蒲御厨の範囲に含まれていたと考えられている。周辺に当時の屋敷地の伝承が多く残る上組遺跡では、かわらけや貿易陶磁器が多数出土している。また、宮竹野際遺跡、山の神遺跡等では屋敷地の区画溝や井戸、掘立柱建物等が確認されている。本遺跡でも2・3次調査で貿易陶磁器や山茶碗等が出土しており、蒲御厨の開発や運営に関わる各小地域の有力者層の存在をうかがうことができる。

なお、本遺跡の東には応長元年（1311）開創とされる日蓮宗妙恩寺が存在する。本遺跡西側にある「法橋のマツ」（静岡県指定天然記念物）は、妙恩寺の建立者である金原法橋の屋敷地にあったと伝わり、かつて広大な寺域を有していたことがうかがえる。

また、山の神遺跡や宮竹野際遺跡からは14世紀以降に低湿地を掘り下げて微高地に盛土することで水田と畑地を造成した島畑の痕跡が確認されており、そうした農村景観が広がっていたと想定される。

3 調査の履歴

松東遺跡では、今回の調査に至るまでに10次にわたる発掘調査が行われている。1次調査は、1989年に行われた企業社屋建設に伴う本発掘調査である。この調査によって弥生時代の環濠が確認された。2次調査は、1990年に1次調査の南側隣接地で行われたマンション建設に伴う本発掘調査である。1次調査で検出された環濠を検出し、銅鐸飾耳の破片が出土したほか、中世以降の遺構・遺物が多く確認された。3次調査は、2012年に行われた天竜川北口の道路（ロータリー）整備事業に伴う本発掘調査である。弥生時代後期の遺構・遺物が多数確認され、本遺跡で2例目の銅鐸出土となる鈕の破片が発見された。また、奈良～平安時代の遺構・遺物も確認され、方形区画溝の内側やその周辺から掘立柱建物跡が検出され、銅印、墨書土器、製鉄にかかわる鞆や鉄滓などの官衙的性格を帯びた遺物が出土した。

4～10次調査はすべて試掘・確認調査である。次数を整理した時期の関係上、次数と調査年次の順序に相違を生じている部分がある。8・9次調査はJR東海道線天竜川駅南側における本遺跡隣接地の試掘調査である。いずれも粘土層の堆積が非常に厚く、遺構・遺物は確認されていないため、駅の南側までは集落は及んでいないと考えられる。10次調査は、本報告である11次調査に先立つ確認調査であり、次節で後述する。

Tab.1 松東遺跡の調査履歴

遺跡調査名	種別	調査原因	調査期間	調査面積	報告書など
松東遺跡1次	本発掘調査	企業社屋建設	1989年12月12日～20日	400㎡	浜文協1990a『松東遺跡発掘調査報告書』
松東遺跡2次	本発掘調査	マンション建設	1990年1月22日～3月31日	1,300㎡	浜文協1990b『松東遺跡Ⅱ』
松東遺跡3次	本発掘調査	道路整備工事	2012年6月1日～2013年3月22日	2,102㎡	浜松市教委2014『松東遺跡3次』
松東遺跡4次	確認調査	集合住宅建設	2008年9月17日	8㎡	浜松市教委2011『浜松市試掘調査概要』
松東遺跡5次	確認調査	駅北口整備事業	2011年3月23日	46㎡	浜松市教委2012『浜松市試掘調査概要』
松東遺跡6次	確認調査	個人住宅建設	2012年9月6日	20㎡	浜松市教委2014『浜松市文化財調査報告』
松東遺跡7次	確認調査	個人住宅建設	2016年1月18日	10㎡	浜松市教委2017『浜松市文化財調査報告』
松東遺跡8次	試掘調査	駅南口整備事業	2018年12月25日	15㎡	浜松市教委2020『浜松市文化財調査報告』
松東遺跡9次	試掘調査	駅南口整備事業	2019年5月20日	4㎡	浜松市教委2021『浜松市文化財調査報告』
松東遺跡10次	確認調査	道路拡幅	2019年11月7日	16㎡	本書
松東遺跡11次	本発掘調査	道路拡幅	2020年5月11日～22日	121㎡	本書
森西遺跡1次	本発掘調査	マンション建設	2004年10月12日～2005年1月25日	1,260㎡	浜文振2005『森西遺跡』
森西遺跡2次	確認調査	店舗建設	2007年10月9日	36㎡	浜松市教委2008『浜松市試掘調査概要』

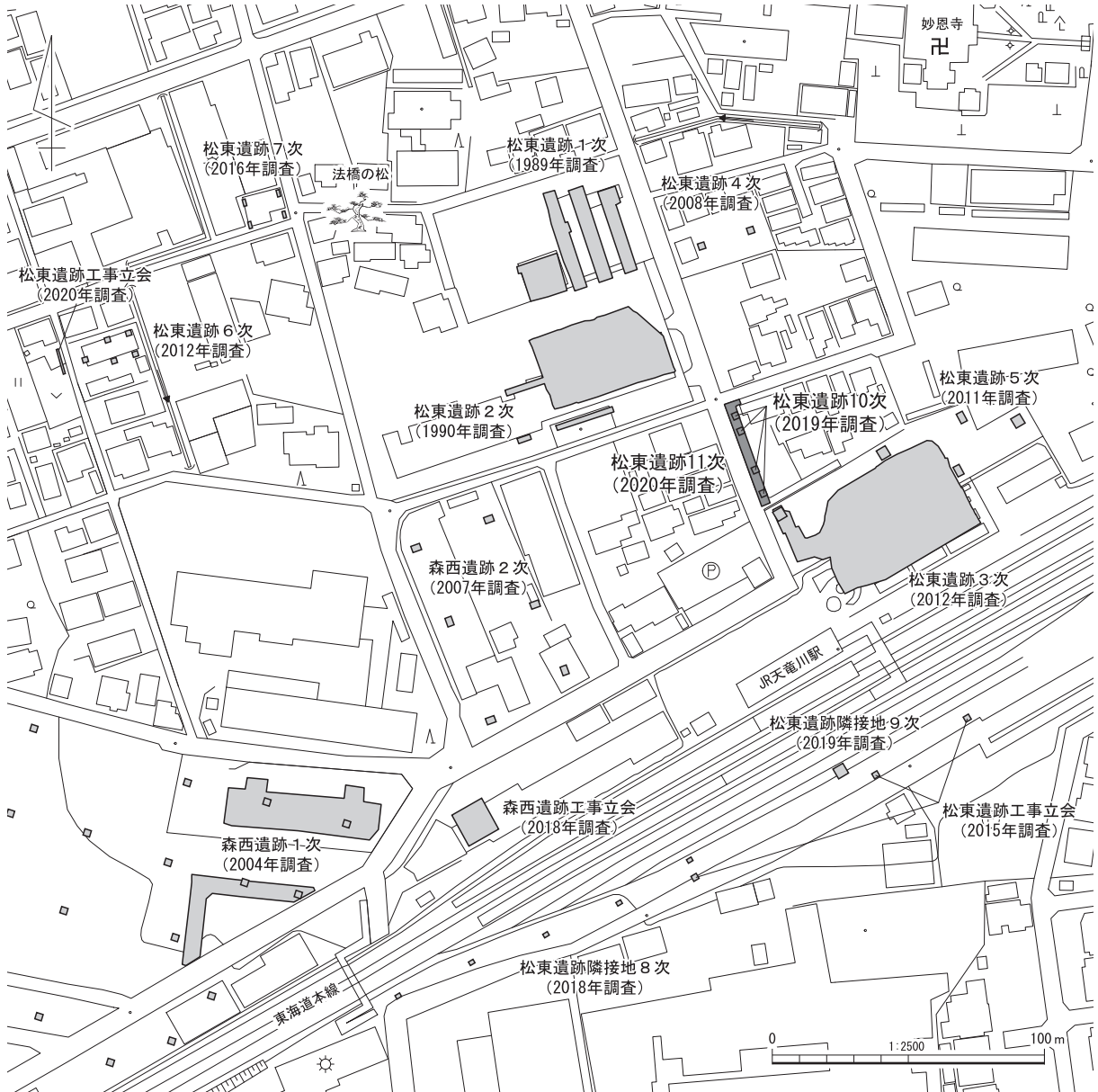


Fig.3 松東遺跡の調査状況

4 確認調査（10次調査）の概要

11次調査に先立つ確認調査（10次調査）では、車道の拡幅を予定している調査対象地に4箇所の調査坑（2m×2m）を設定して行った。

基本層序は、Ⅰ層：表土、Ⅱ層：近代以降の盛土層、Ⅲ層：ゆるいシルト層、Ⅳ・Ⅳ'層：粘土層、Ⅴ層：砂層及び砂礫層（基盤層）である。遺物包含層は、Ⅳ層の中でも下層の暗い色調の粘土層でありⅣ'層とした。Ⅳ'層は調査坑のすべてで確認され、弥生時代～鎌倉時代の遺物を包含している。Ⅲ～Ⅳ層には遺構・遺物は確認されなかった。調査坑4は基盤層であるⅤ層が調査坑1～3より50cm程度高く、3次調査区に近い南側から北側に向かって地形が下がっている状況が明らかとなった。

遺構は調査坑4で基盤層を掘り込む土坑が1基検出された。埋土は炭化物を含む黒褐色粘土で、少量の弥生土器を含んでいた。

遺物は土坑のほかに全ての調査坑の遺物包含層で確認されたが、いずれも小片であり、図示できる個体は存在しなかった。出土したのは、弥生土器が主体で、須恵器・土師器も少量確認された。

調査の結果、調査坑1～3では基盤層が低く遺物の出土量はそれほど多くはなかったものの、銅鐸破片が出土している2次調査区と3次調査区の間地点に位置し、重要遺物が出土する可能性も想定されたため、車道拡幅予定地全体を本発掘調査の対象とした。

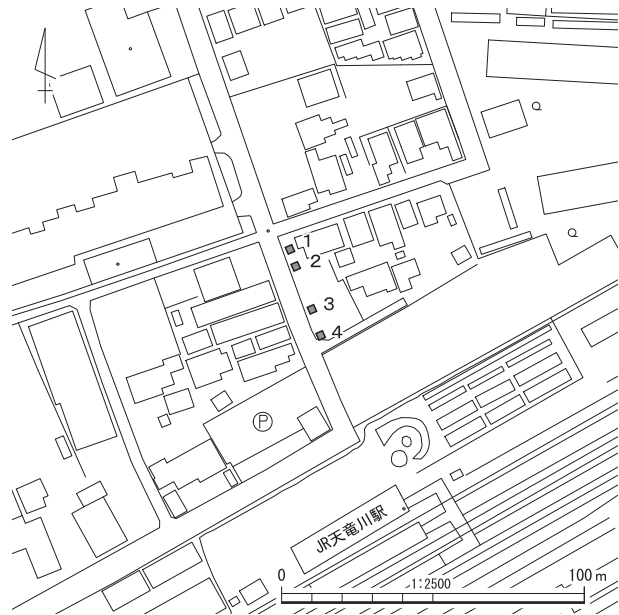


Fig.4 確認調査坑箇所図

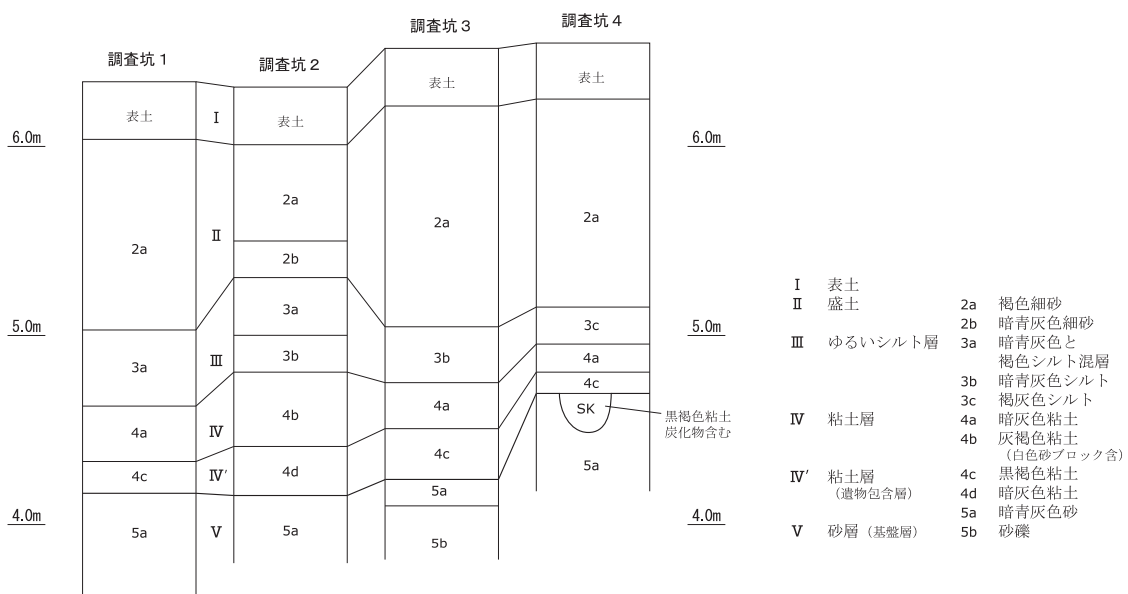


Fig.5 確認調査土層柱状図

第2章 調査の成果

1 調査の概要

調査区 Fig.6 に調査区全体図を示した。幅 3 m、延長 39.5m と南北に細長く、北東部が 2 m × 1.5 m の規模で突出している。土層確認と湧水排出のために周囲に幅 30 cm の排水溝を設けている。

土層堆積状況 確認調査時と同様でⅠ層：表土、Ⅱ層：盛土層、Ⅲ層：シルト、Ⅳ・Ⅳ'層：粘土、Ⅴ層：砂及び砂礫（基盤層）であったため、Ⅳ層まで重機で除去し、遺物包含層のⅣ'層は人力掘削を行った。調査区南側の基盤層の標高は 4.7 m であるが、北側では標高 4.2 m と北へ向かって低くなっている。ただし、北端部には若干地形の高まりがみられ、遺構も検出されている。

遺構検出状況 土坑 11 基、小穴 1 基、溝 2 条、井戸 1 基、不定形遺構 1 基を検出した。調査区の南部と北端部に偏在しており、基盤層が低い北～中央部では遺構は確認されず遺物もほぼ出土しなかった。遺構の大半はⅤ層上面から掘り込まれているが、SE01 はⅣ'層上面で確認されている。

遺物出土状況 出土遺物の多くが弥生時代後期後半の欠山式段階の土器で、その他に須恵器・土師器・灰釉陶器・中世陶器等がわずかに含まれる。大半が小片で、図化できたものはごく一部である。

2 検出遺構

SK01～05 調査区南部で確認された土坑群である。SK02 は確認調査で検出した土坑で、長径 1 m、短径 50 cm、深さ 25 cm を測る。弥生土器が出土しているが図示できる個体はない。出土遺物から遺構の時期は弥生時代後期と考えられる。SK03 は SK01 や SD01 を切っている。東側の一部は調査区外に及んでおり、検出部分の長径 95 cm、深さ 28 cm である。山茶碗や常滑産陶器が出土しているが図示できる個体はない。出土遺物から鎌倉時代の遺構と考えられる。SK04 は西側が調査区外に及んでいる。楕円形状を呈し、長径 1.6 m、短径（検出値）50 cm、深さ 28 cm である。弥生土器（Fig.9-1）が出土しており、遺構の時期は弥生時代後期と考えられる。SK05 は西側が調査区外に及んでおり、ややいびつな楕円形を呈すると推定される。検出部で長径 1.84 m、短径 95 cm、深さ 32 cm を測る。弥生土器が多数出土しており（Fig.9-2～16）、遺構の時期は弥生時代後期後半と考えられる。

SK06～11、SP01 調査区の北端で集中して検出されている。SK06、07、09、10 で弥生土器の小片が出土している。埋土はいずれも黒色シルトであり、弥生時代後期の遺構と考えられる。

SD01・02 調査区南部で 2 条の溝が確認されている。SD01 は北西 - 南東方向に延びる溝である。SK03 と SE01 に切られており、検出長 1.3 m、幅 60 cm、深さ 20 cm を測る。弥生土器が出土している。SD02 は南北に延びる溝である。北部が調査区外に及んでいるため全長は不明である。検出部の長さ 3.0 m、幅 90 cm、深さ 10 cm を測る。弥生土器が出土している。

SE01 東側が調査区外に及んでいる。2 段に掘り込まれており、外側は長径 2.38 m、短径（検出値）1.42 m、深さ 32 cm、井戸部分は直径 80 cm で、深さは湧水が著しく確認できなかった。井戸枠には竹を編んだものが部分的に検出されたが、分解が進んでおり取り上げることはできなかった。遺物は出土していないため遺構の時期は不明であるが、Ⅳ'層上面から検出されていたため、中世後半以降に時期が降る可能性が高い。

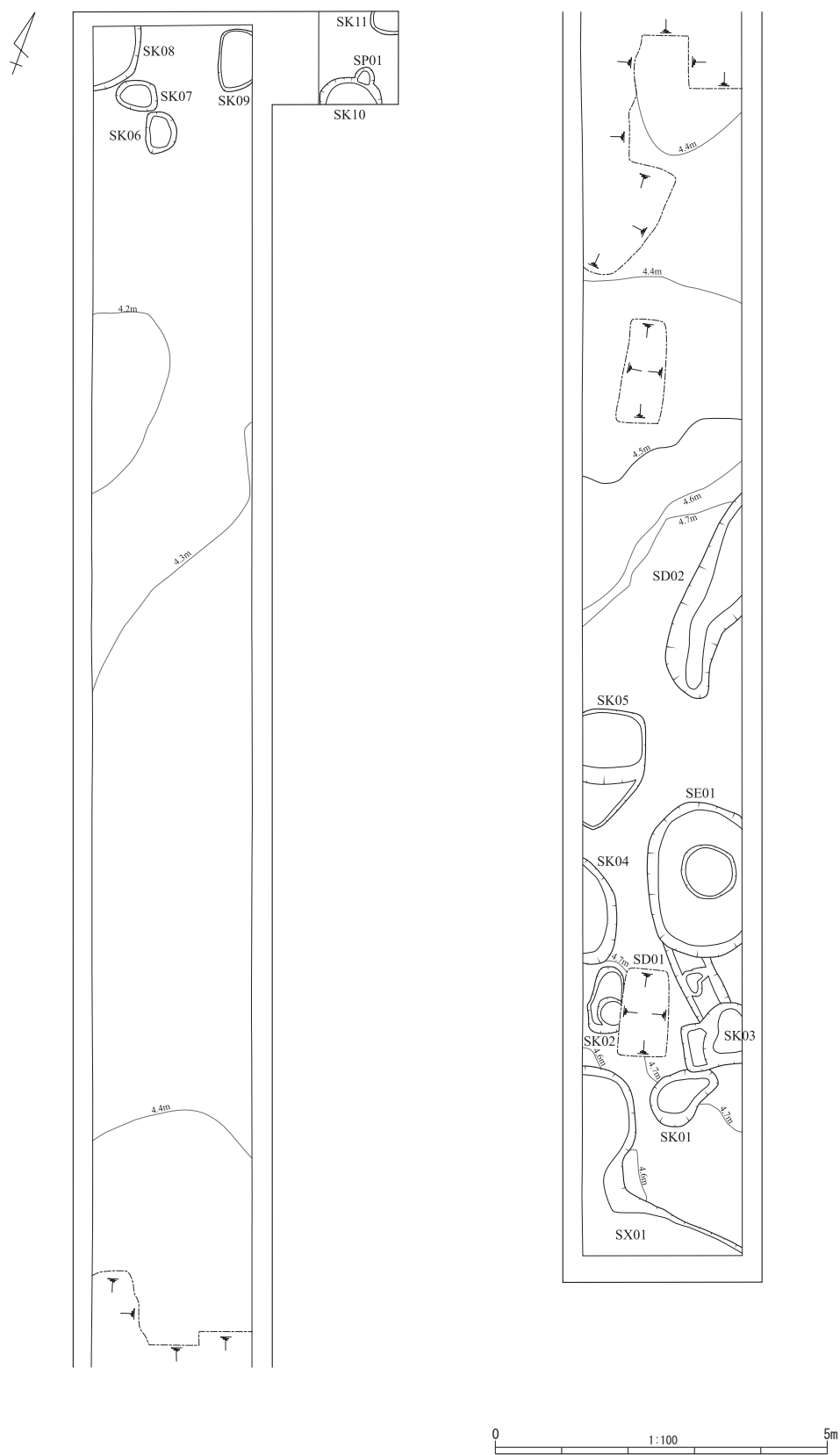


Fig.6 調査区全体図

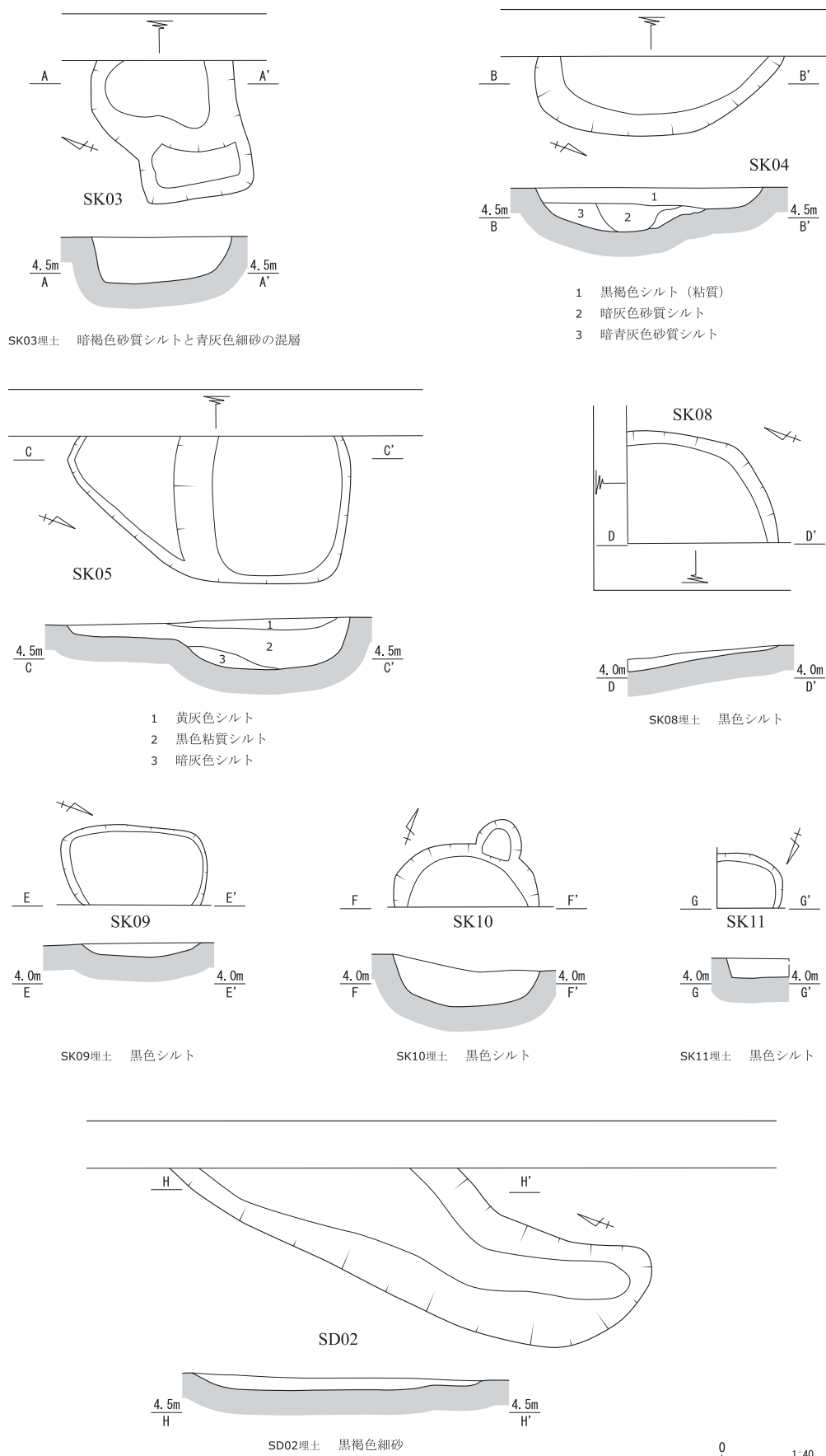


Fig.7 遺構実測図 (1)

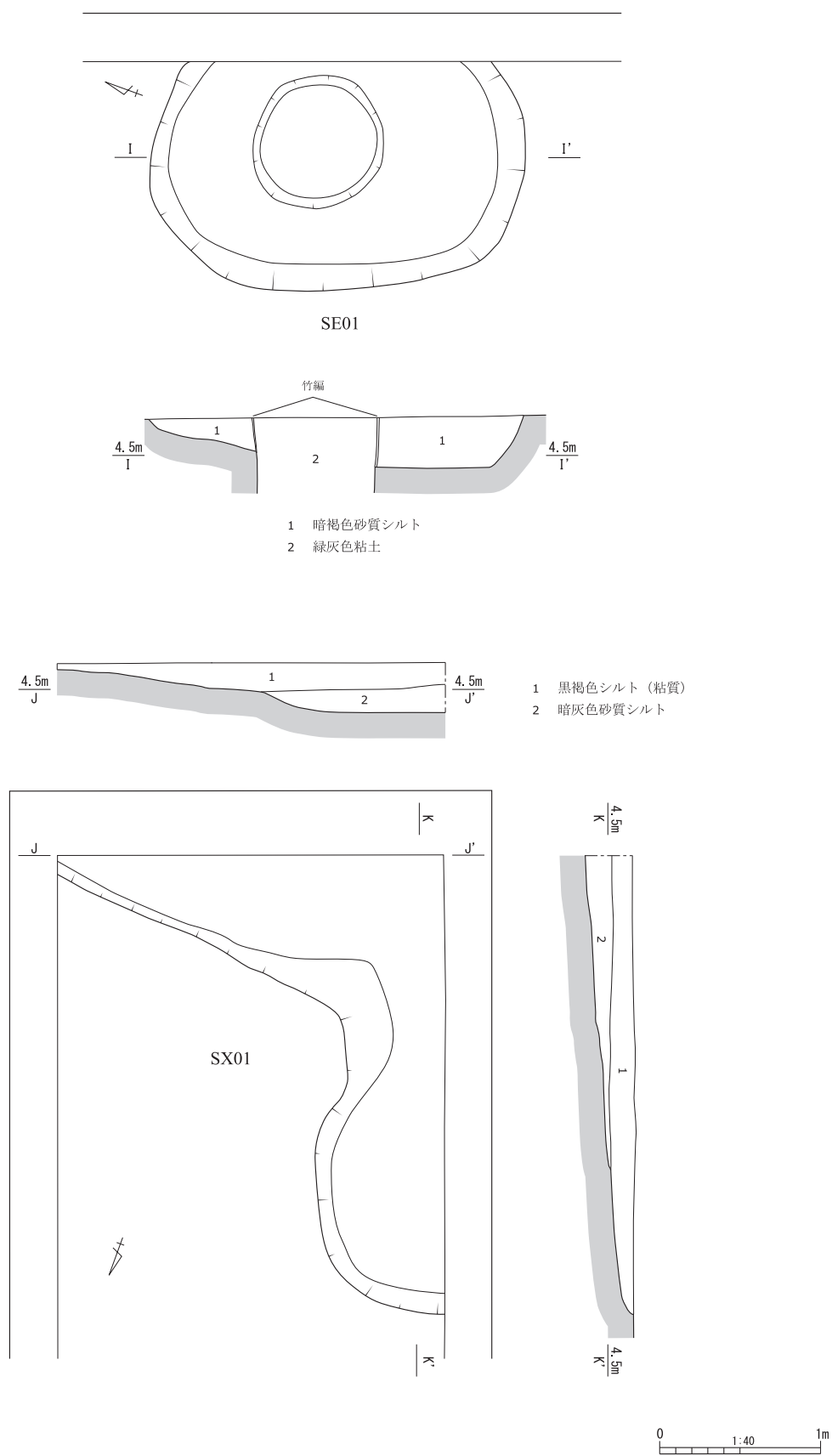


Fig.8 遺構実測図 (2)

SX01 調査区南西隅で検出された不定形遺構である。南～西側は調査区外に及んでおり、検出部の規模は、東西 2.4m、南北 2.86m、深さは 30cm を測る。弥生土器が数点出土しているが、いずれも図示できなかった。出土遺物から遺構の時期は弥生時代後期と考えられる。

3 出土遺物

弥生土器 1～18 は弥生土器である。小片で時期を判断できない個体もあるが、概ね後期後半の欠山式段階の所産と考えられる。

1 は SK04 から出土した直立口縁壺である。

2～16 は SK05 からの出土である。2～11 は壺、12～14 は高坏、15・16 は甕である。2 は拡張口縁壺で、菊川式の搬入品と考えられる。3 は折返口縁壺で、胎土は在地の個体と変わらないが、内面に縄文が施されるなど天竜川以東の影響がうかがえる。4～6 は内湾口縁壺である。5 は内外面のミガキ調整が確認できる。7 は肩部破片で、刺突による羽状文と山形文が施されている。8～10 は底部破片である。8 は胎土が粗く、底部の規模からも大型品とみられる。9 の底面には木葉痕が認められる。11 は胴部下半～底部の破片で、外面はミガキ調整によって仕上げられている。12～14 は高坏である。12 は内湾形の坏部で、内外面にミガキ調整が施されている。13 は脚部上半部の破片、14 は内湾して広がる脚部下半部の破片で、いずれも外面にはミガキ調整が確認される。15・16 は台付甕である。いずれも口縁部の屈曲は弱く口縁端部には浅い刺突が施されている。17・18 は遺物包含層からの出土である。17 は高坏の坏底部～脚部付け根の破片で、付け根部の径は 3.8 cm を測る。外面にはミガキ調整が確認される。18 は壺または鉢の底部破片で、底径は 9.1 cm を測る。底面にはわずかに木葉痕が残る。

須恵器・灰釉陶器 いずれも遺物包含層からの出土である。19・20 は須恵器である。19 は口縁部を欠く有台坏身の破片で、8 世紀代のものと考えられる。20 は小片であり確証を得ないが高坏形器台の脚部と考えられる。外面には波状文が施されている。6 世紀代頃のものと思われる。

21・22 は灰釉陶器の底部破片であり、いずれも 10 世紀代のものと考えられる。

なお、小片のため図示していないが、土師器、山茶碗、常滑産陶器、天目茶碗、内耳鍋、かわらけなど古代～中世末の遺物が出土している。

Tab.2 出土遺物観察表

Fig	No	遺 構	種 別	細 別	残存	反転	口径	器径	器高	底径	胎土	焼成	色 調	備 考
9	1	SK04	弥生土器	直立口縁壺	10%	反	14.0				密	良	灰黄色	
9	2	SK05	弥生土器	拡張口縁壺	10%	反	17.8				密	良	灰白色	菊川系
9	3	SK05	弥生土器	折返口縁壺	5%	反	15.8				密	良	にぶい黄橙色	
9	4	SK05	弥生土器	内湾口縁壺	10%	反	15.2				密	良	浅黄橙色	
9	5	SK05	弥生土器	内湾口縁壺	10%	反	15.4				密	良	にぶい黄橙色	
9	6	SK05	弥生土器	内湾口縁壺	10%	反	15.0				密	良	にぶい黄橙色	
9	7	SK05	弥生土器	壺	10%						密	良	浅黄橙色	
9	8	SK05	弥生土器	壺	10%	反				10.0	粗	不良	灰黄色	
9	9	SK05	弥生土器	壺	10%					6.3	密	良	にぶい赤褐色	底部木葉痕
9	10	SK05	弥生土器	壺	10%	反				8.0	密	良	灰黄色	
9	11	SK05	弥生土器	壺	30%	反	17.8	25.5		7.3	密	良	にぶい黄橙色	
9	12	SK05	弥生土器	碗形坏部高坏	20%	反	23.6				密	良	にぶい橙色	
9	13	SK05	弥生土器	高坏	20%	反					密	良	にぶい黄橙色	接合部径4.6cm
9	14	SK05	弥生土器	高坏	10%	反				13.8	密	良	にぶい橙色	
9	15	SK05	弥生土器	甕	10%	反	20.0	25.2			密	良	にぶい黄橙色	内外面スス付着
9	16	SK05	弥生土器	甕	10%	反	17.6				密	良	にぶい黄褐色	
9	17	低湿地	弥生土器	高坏	10%	反					密	良	橙色	接合部径3.8cm
9	18	包含層	弥生土器	壺または鉢	10%	反				9.1	密	密	橙色	底部木葉痕
9	19	包含層	須恵器	有台坏身	20%	反				10.9	密	良	灰白色	
9	20	包含層	須恵器	高坏形器台か	10%	反					密	良	灰色	
9	21	包含層	灰釉陶器	碗	20%	反					密	良	灰白色	
9	22	包含層	灰釉陶器	碗	10%	反				7.2	密	良	灰白色	

※法量の単位はcm

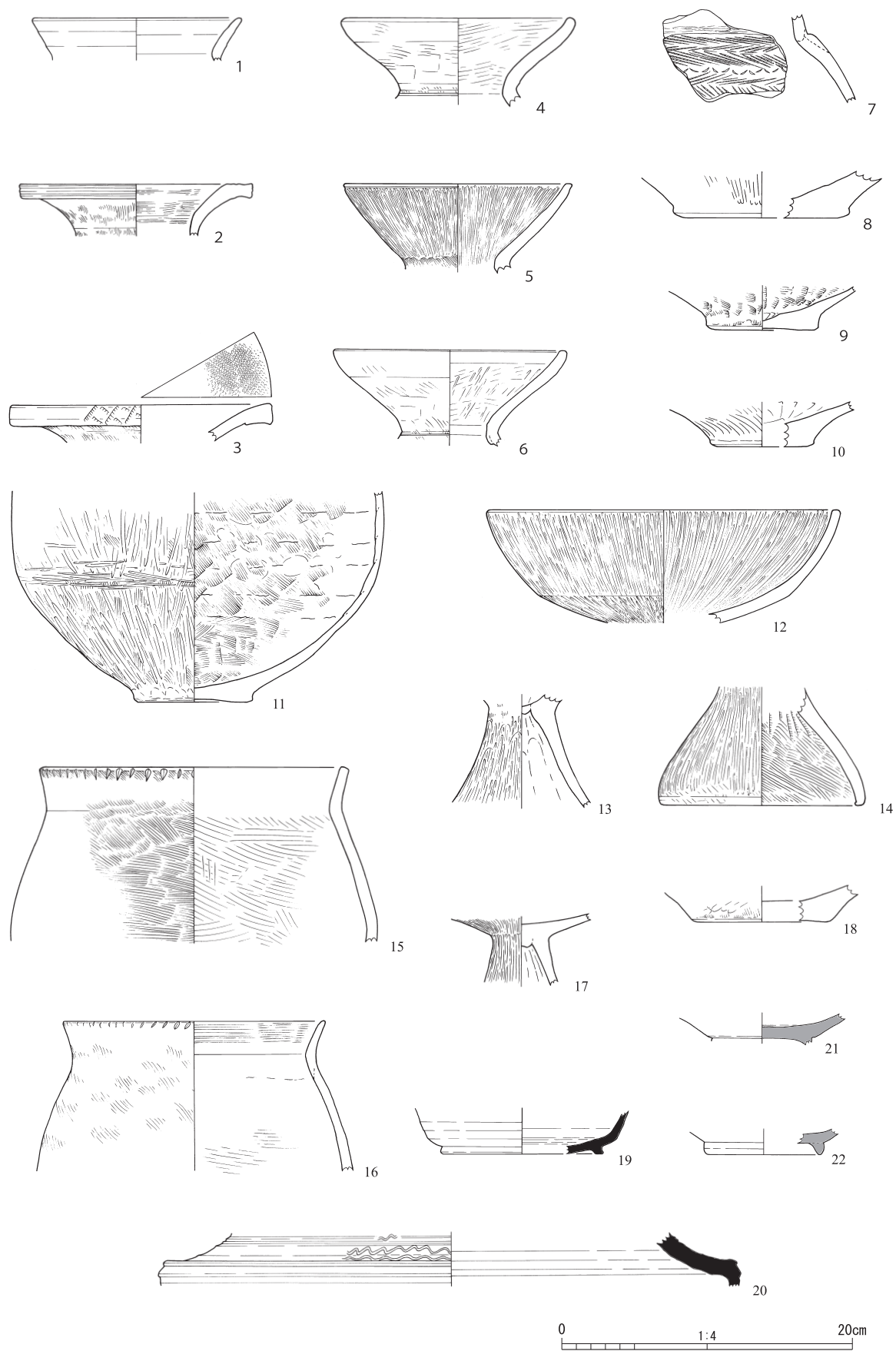


Fig.9 出土遺物実測図

第3章 総括

今回の調査では、土坑 11 基、小穴 1 基、溝 2 条、井戸 1 基、不定形遺構 1 基を検出し、弥生時代後期後半代を中心とする遺物が出土した。

今回の調査地は、過去に本発掘調査が行われ弥生時代の集落が確認された 2 次調査地と 3 次調査地の中間地点に位置する。調査の結果、2 次調査地に近い調査区北端と、3 次調査地に近い調査区南部で遺構・遺物が確認され、調査区中央部は低湿地の状態であった。このことにより、今回の調査区北端部の遺構は 2 次調査で確認された集落の端部で、調査区南部で確認された遺構は 3 次調査で確認された集落の端部であり、調査区中央部で確認された湿地または河道によって隔てられていた可能性が考えられる。

今後は、今回調査区の周辺を中心に調査成果を蓄積することで、当遺跡における弥生時代の集落範囲の再検討を行うとともに、時代による土地利用の状況を明らかにしていくことが期待される。

参考文献

- (財) 静岡県埋蔵文化財調査研究所 1997 『山の神遺跡』
- (財) 静岡県埋蔵文化財調査研究所 2006 『宮竹野際遺跡』
- 静岡県埋蔵文化財センター 2012 『将監名遺跡』
- 浜松市遺跡調査会 1982 『越前遺跡発掘調査報告書』
- (財) 浜松市文化協会 1989 『山の神遺跡』
- (財) 浜松市文化協会 1994 『宮竹野際遺跡 2』
- (財) 浜松市文化協会 2000 『山の神遺跡 5 次』
- (財) 浜松市文化協会 2004 『大蒲村東 I・II 遺跡』
- (財) 浜松市文化協会 2005 『森西遺跡』
- (財) 浜松市文化振興財団 2011 『木船廃寺 2 次』
- (財) 浜松市文化振興財団 2012 『宮竹野際遺跡 6 次』
- 浜松市教育委員会 2018 『宮竹野際遺跡 7』

※当遺跡の過去の調査報告にかかる文献は、Tab.1 に掲載されているため割愛した。



1 調査区全景（北から）



2 調査区全景（南から）



3 調査区南部完掘状況（北から）



4 調査区南部完掘状況（南東から）



1 調査区北端部完掘状況（東から）



2 SK01（北西から）



3 SK02（北から）



4 SK03・SD01（北西から）



5 SK04（北から）



6 SK05（東から）



7 SK06・07・08（南東から）



1 SK10・SP01 (北西から)



2 SK11 (南から)



3 SD02 (北西から)

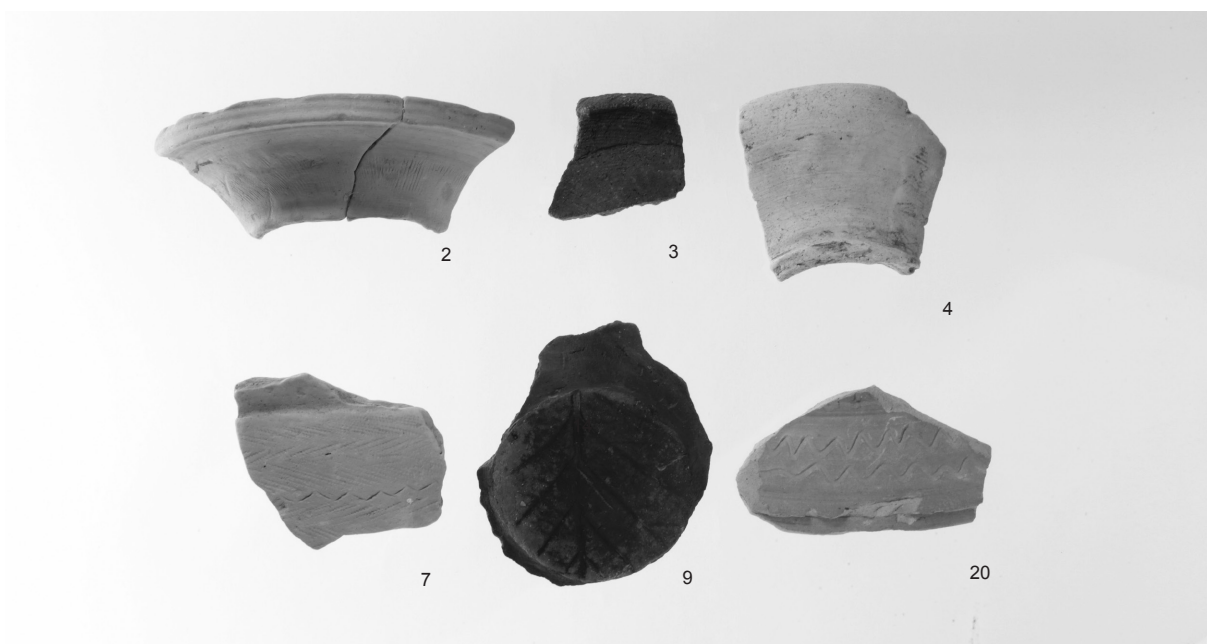


4 SE01 (南西から)



5 SX01 (北から)

PL.4



出土遺物

報告書抄録

書名（ふりがな）		松東遺跡 4 ―11 次調査の成果― （まつひがしいせき 4 ―11 じちょうさのせいか―）						
編著者名		鈴木京太郎						
編集・発行機関		浜松市教育委員会（浜松市市民部文化財課が補助執行） 浜松市市民部文化財課 〒430-8652 浜松市中区元城町 103-2 TEL（053）457-2466 FAX（050）3730-1391						
発行年月日		2021年 3 月 31 日						
ふりがな 遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
まつひがしいせき 松東遺跡	静岡県 浜松市 東区 天龍川町	22132	2-06-6	34 度 43 分 04 秒	137 度 46 分 45 秒	2020 年 5 月 11 日 ～ 5 月 22 日	121 m ²	道路拡幅
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物	特記事項	
松東遺跡	集落	弥生時代 古墳時代 奈良時代		土坑・小穴 ・溝・井戸 ・不定形遺構		弥生土器 須恵器 灰釉陶器	弥生時代後期後半を主体 とした遺構、遺物を確認	
要 約	松東遺跡は静岡県浜松市東区天龍川町に所在する弥生時代～中世の遺跡である。遺跡は天竜川沖積平野に形成された微高地に立地している。今回の 11 次調査では、弥生時代後期後半を主体とする遺構・遺物を確認し、土坑 11 基、小穴 1 基、溝 2 条、井戸 1 基、不定形遺構 1 基を検出した。出土遺物は、弥生土器、須恵器、灰釉陶器などである。 特筆すべき事項としては、過去にそれぞれ弥生時代の集落が確認されている 2 次調査と 3 次調査の中間地点に今回の調査位置が位置しており、調査区の中央部で低湿地または旧河道状の地形が確認されたことにより、集落が南北で分かれていた可能性が生じたことがあげられる。							

松東遺跡 4

～11次調査の成果～

2021 年 3 月 31 日発行

発 行 浜松市教育委員会
 印 刷 中部印刷株式会社

Matsuhigashi Site 4

The 11th Excavation Report

A Report of Archaeological Investigation
in Western Shizuoka Prefecture, Japan



March, 2021

Hamamatsu Municipal Board of Education